

わたしの戦争体験

福岡市東区 鳥越 次夫

昭和18年、私は長崎で徴兵検査を受けた。従来からあった学生に対する徴兵延期の制度が廃止され、適齢がくると容赦なく順番が回ってくるようになった。検査は市の公民館であったが、対象者は私達学生であった。陸軍の現役士官や下士官が検査官で、他に屈強な憲兵が一人睨みをきかしていた。啖の検査のところで啖が出ずにまごまごしていると、その憲兵がやってきて「何をぼやぼやしとる、俺が出してやる」。といて腕立て伏せを数十回やらされた。幸いに私は体操班にいてそういう事もやっていたので何とかこなせたが、他の幾人かは相当苦しい目にあっていたようだ。愈々判定の番になった。私の直ぐ前は中学時代からの同級生で、体格も私によく似ていて友達から時々間違われる程であったが、その友人は検査官から「骨が細いな、貴様第二乙だ」と言われた。次に私が恐る恐る進み出ると「貴様の方が少しは増しだ、よし第一乙」、運命の別れ道だった。当時は甲種合格と第一乙種合格者が現役入隊と定められていた。私は複雑な気持ちだった。晴れがましいような、怖いような思いが脳裏をよぎった。

同級生の中には海軍の予備学生に志望する者もかなりいたが、頭脳も体力にも自信がなかった私は志願しなかった。聞くところによれば、大部分は航空部門に回されるということであった。当時の殆どの学生は戦争の前途について悲観的な見方はしていなかった。それでも飛行機に乗るといことは、暗暗裡に危険な選択という思惑はあったように思う。かといって徴兵から逃れることは不可能だった。どうせ命なら華々しく散ろうという気持ちが強かった。

翌年1月5日、私は久留米第48部隊、即ち久留米第12師団歩兵第48連隊に入隊した。出発の朝は村人挙げての盛大な歓呼の声に送られて駅まで行進した。

「お前ら、外地行きか、仏様になるのも早やかろうが、なーに代りは1銭5厘で何ぼでも来る、安心して行ってきな」。内務班では古参上等兵の毒舌を毎日聞かされた。おまけに声が小さいといっちはビンタ、動作が鈍いといっちは蹴られ、食事するのが遅いといっちは殴られるの連続で、出発までの1ヶ月の長かったこと、辛かったこと。2月8日、どうやら輸送船は我々を乗せて門司港を出発したものの、その夜更け、東シナ海で待ち伏せていた米潜水艦の魚雷攻撃を食らって、十数隻の船団は瞬く間に殆ど沈没してしまった。私が乗った船は7、8千t位の老朽貨物船で、初年兵主体に約1万人の兵員と武器を満載していたが、助かったのは僅か300人足らず、殆どが凍死、溺死だった。当日昼間訓練で、甲板で中学の同級生と偶然一語になり笑顔を交換したのも束の間、友はその晩に爆死してしまった。その友の最後の笑顔が未だに忘れられない。

九死に一生を得た私は、2度目の航海は怖くて仕方がなかった。今度は飛行機に襲われたが何とか窮地を脱し、その年の5月頃中国南部の広東に上陸した。早速珠江沿いに行程何百里かの大遠征に参加することになった。

ある日、行軍中突然左前方から敵の攻撃を受けた。敵の姿は見えない。前方一面水田だ。命

令一下疎開し、各個に手前のクリークを横断することになるが、何しろ敵の眼前に姿を晒すことになる。味方も重機関銃の援護射撃はあるのだが、クリークの土橋は人一人がやっと通れるくらい。いよいよ私の走る番だ。全速力で走る。道の半分程の所で息が切れる。おまけに履いていた地下足袋の止め金（こはぜ）が外れてすっぽ抜けそうになった。慌ててしゃがんで止めようとするが、なかなかはまらない。分隊長の怒声が飛ぶ「何してるんだ！靴は捨てろ！」。私としては後のことを考えると足袋をここで捨てるわけにはいかない。どうやら留め終えると転がるように水田の中に走り込んだ。全身泥だらけだ。

私達のいる中国戦線では未ださほどの切迫感はなかったが、それでも時々アメリカのグラマン戦闘機が飛んできて低空から銃撃を浴びせる。ある日、昼間船で川を遡行中、不意に現われた米戦闘機に狙われ超低空から物凄い銃撃を受け、先頭の船にいた指揮班の数人が犠牲となった。この中に、ついこの間会って親しい挨拶を交わしたばかりの私の中学の先輩がいた。彼は乙幹出の軍曹であったが、たまたま指揮班長で小隊長と同じ船だった。小隊長は辛うじて無事だったが、彼は右肩から左胸へ貫通銃創を受け即死状態であった。生死ままたらぬ戦場とはいえ、その夜屍衛兵となり、彼を始め数人の戦死者の火葬に立ち会った私は、言いようのない悲しみに襲われた。それ以来私達は、昼間は木の間を縫うようにして歩き、夜は船で行くといった具合で行軍を続けた。

中国は俗に“南船北馬”と言われる程で中国南部には川やクリークが多く、而もそれに架かる橋が極めて少なかった。小さな川は丸太棒などを渡し、胸の辺りになる所にロープを張り、それを伝ってバランスを取りながら渡河するのだ。兵士は皆完全武装なのでこれがなかなか難しい。バランスを崩して落下したら最後、浮上は無理と思われただけに皆慎重だった。本当に道なき道を重い装備で歩くのだから並大抵ではない。夜行軍の時は目印に背中の背負袋に白い布切れを30cm位垂らす。睡魔とも闘わねばならない。私と同年兵の一人に佐賀県出身のGという兵隊がいた。痩せていて顔も蒼白く、連日の強行軍にすっかり疲れきっていた。この時は夕刻にある村に着いたのだが、大隊命令でその日はここで一泊することになった。皆喜んで酒など持ち出して久しぶりに手足を伸ばしていると、急に命令が変わり直ちに出発することになった。さあ大変！急遽整列した時にはG二等兵は酔って足元がふらついていた。そのまま歩き出したが小一時間もするととうとう彼は倒れてしまった。戦友4、5人で彼の装具を分けて持ち、同年兵の中で身体のがっちりした者が彼を背負って行くことになったが長くは続かない。結局菰に包み前後をロープで結び太い竹竿を通し2人で持つことになった。私は彼の小銃を持っただけであったが、その道のりの長かったこと。ある地点で大休止した時、遂にG二等兵は既に冷たくなっていた。明日は我が身かと茶毘の焰を見ながらしみじみ思った。何のための犠牲か、人の命を虫けら同然に考えていた当時の軍部のあまりにも無謀な作戦で、このようにして数百万の若い命が断たれていったのだ。幸いに私は今日まで命を長らえることが出来たが、異境の地でまた南海の底に無念の思いを残して死んでいった私の戦友達の霊にどうしたら報いられるか、またどのように慰めたらいいのか、未だに苦しむ日々である。